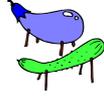




2004・夏号
発行：法問寺
題字：鈴木裕子

仏教の行事 お盆



「お盆」はさまざまに仏教の年中行事の中でも最も広く親しまれ、日本人の生活に根づいている行事のひとつです。正式には「盂蘭盆会（うらぼねえ）」と言います。釈迦の高弟である目連（もくれん）は餓鬼道（がきどう）に墮ちて飢えと渇きに苦しんでいる母を見かね、釈迦の教えに従って多くの僧侶

を招き、さまざまに馳走を供えて供養したところ母を地獄から救い出すことができたという。



この話から祖先の霊を迎えて供養し、その功德によって苦しみの世界から救い出し浄土に送りかえす盂蘭盆会の行事が生まれましたといわれています。日本では「先亡の霊が帰る」という古くからの民間信仰と、仏教の盂蘭盆会が融合して現在のお盆のかたちになったと考えられています。古くは七月十五日を中心に行なわれていたが、霊に長く逗留してほしいという気持ちから

期日が延び七月二三日から一六日

（地方によっては一五日）までとするのが一般的です。最初の日を「迎え盆（お盆の入り）」、最後の日を「送り盆（お盆の明け）」と言います。



法問寺では先亡の霊が帰ってくる目印としてローソクの光でお迎えする

「みたまお迎え法要」を行っています。ぜひ法要に参加して、ご自身みずから「みたま」をお迎え下さい。

永代供養墓の計画

前回の「こつみょう」でお知らせいたしました「永代供養共同墓」建立について、候補地を本堂前左手の中島家墓所を提供していただきました。中島家の墓所は中島直美様、中島芳男様、中島多喜子様の三軒の方でお守りいただいております。建立案を諒解していただき墓所提供に協力をいただきました。この旧中島家墓所を、永代供養墓建立地とさせていただきます。尚、三軒の中島家墓所についてはそれぞれ分散してしまいましたが、法問寺境内での相当墓所として新しく建立させていただきます。現在はそのような永代供養墓にするか検討しております。



「写経の会」報告

去る六月二十日に写経の会を開催いたしましたところ、今回は六名の檀家の方が参加されました。写経の内容は「三尊礼（さんそんらい）」という普段のご法事でもお読みするお経をお手本といたしました。このお経は阿弥陀様、観音菩薩様、勢至菩薩様の三尊を讃えるお経で、今回は最初の阿弥陀様を讃える部分を書き写しました。あと二回分です。お経が完成します。写経中は声を掛けるのも遠慮するほど静粛な雰囲気の中で、参加された皆様は三枚ほどのお経を写され、気分、癒された後にお茶を飲みながら談笑して散会いたしました。次回は秋に予定しておりますので参加者が増えるよう期待しております。今回の参加者は小野昇様・佐藤キミ様・松島フミ様・三瓶洋一様・高沢ゆき様・渡辺忠昭様でした。



法問寺に咲く花



「卯の花のおう垣根に」とはじまる「夏は来ぬ」という曲があります。この、「卯の花」というのがつつぎ(空木)のことです。俳句では「夏」の季語ですが、五く六月ころに花をつけます。本当の空木は茎の中が空洞なことから「空木」(つつぎつつぎ)と呼ばれ、花は細長い五弁の花びらの白い花

です。ここに紹介するのは「梅花つつぎ」という種類のまあるい、かわいい白い花をつけるものです。また、今年は、念願の「墨田の花火」を春先に挿し木しましたところ、たった一〇センチ程



度の枝が、無事に延びて、みことに大輪の花を咲かせてくれました。このほかに、ガクアジサイや普通の紫陽花も段々と育って来ていて、六月のこの時期、色を変えつつ楽しませてくれています。今回は、梅花つつぎ、墨田の花火と、白い花、ふたつご紹介しました。



編集後記 住職

昭和三十年代の頃、お盆になると夜遅くまで多分八時頃まで檀家の方々が提灯をもつてお参りに来ていたのを思い出します。子供たちは空き缶にローソクを立てて近所を練り歩いたものです。蚊取り線香の匂いとむし暑さが懐かしくなります。現在では提灯を持つてお迎えすることが少々むずかしくなりましたが、お盆の法要には是非皆様お揃いでお参りして下さい。 南無南無